

日本と海外のサッカーにおける選手育成環境の比較

Comparison in soccer player promotion environments of Japan and overseas

1K03B131-8 寺本大樹

指導教員 主査 中村好男 先生 副査 堀野博幸 先生

【緒言】

2006 サッカーワールドカップドイツ大会において、日本は予選リーグ敗退という結果に終わった。一方で、ワールドカップ全体を総括すると、20 歳前後の若い選手たちが非常に活躍した大会であった。優秀な若い選手を次々に輩出する国々は、育成環境が整っているのではないだろうか。そこで、ワールドカップで上位入賞した、スペイン、イタリア、ポルトガルといった欧州各国と日本を比較し、日本の選手育成環境の問題点を挙げ、課題克服への取り組みを提言する。

【スペインにおける選手育成環境】

スペインは、2006 ワールドカップドイツ大会では、決勝トーナメント 1 回戦で惜しくも準優勝のフランスに敗れたが、長年にわたり世界のサッカーをリードしてきた。それを支えているのは、やはりスペインリーグである。育成年代の選手たちもスペインリーグに所属するチームの下部組織を中心に充実した環境の中で育成されている。選手たちは 2~3 歳ごとに細かくカテゴライズされ、その発育発達状態に即した指導を受けることができる。また、育成年代においてもプロ選手と同じサイクルのシーズンを過ごす。少人数のチームで毎週末のリーグ戦をこなしていくため、スペインの選手たちは多くの試合を経験する中で育成されていく。さらに、この試合数は特定の強いチームだけに保証されているものではなく、あらゆるレベルのあらゆるカテゴリーの選手たちに保証されている。このような底辺での環境の充実が、国内リーグのレベルアップにつながり、ひいては国の代表のレベルアップにつながっている。

【イタリアにおける選手育成環境】

イタリアは、2006 ワールドカップドイツ大会で、ブラジルと並び最多となる 4 度目の優勝を果たした。イタリアにおいても、世界最高峰の国内リーグ「セリエ A」のクラブを中心に選手の育成が行われている。スペインと同様に選手は細かくカテゴライズされ、それぞれのカテゴリーのそれぞれのレベルにリーグが存在し、公式戦のなかで選手が育成されていく。また特長として、それぞれのクラブはイタリアサッカー協会の認可を受けて選手を指導してお

り、サッカー協会はクラブの育成環境を審査しランク付けするほか、各カテゴリーに応じた細やかな育成指針をクラブに対して示している。プロチームと地域のクラブとの連携も強固であり、サッカー協会のサポートの下、各地のクラブを中心とした裾野の広い育成環境が整備されている。

【ポルトガルにおける選手育成環境】

ポルトガルは、2006 ワールドカップドイツ大会で、ベスト 4 という過去最高の成績を残した。また、1989, 1991 年のワールドユース選手権を連覇したことは広く知られており、当時の中心選手の成長とともに A 代表が好成績を残すようになった。ポルトガルにおいても、国内リーグの「ビッグ 3」と呼ばれる強豪クラブを中心に各クラブ主導の育成環境が整っている。前述した 2 つの国と同様にポルトガルにおいても、細かくカテゴライズされたチームと充実した施設を持つ国内リーグのクラブが、地域クラブと連携しながら、年間を通して行われるリーグ戦の中で選手を育成している。

【日本における選手育成環境】

日本は、2006 ワールドカップドイツ大会で予選リーグ敗退に終わった。選手育成環境も、前述した欧州各国とは大きく異なる。6・3・3 の学校制度によって大きくカテゴライズされた各クラブでは選手の発育発達段階に合わせた適切な指導を行うことはできない。加えて、日本の育成年代における公式戦はトーナメント形式が主流であり、選手は十分な試合経験を積むことができない。

さらに、日本サッカー協会は、トレーニングセンター制度や JFA アカデミーによる一部のエリート育成に注力しすぎており、地域やクラブの活性化、サッカー界全体の底上げをおろそかにしている。

【考察・結論】

選手に対してきめ細やかな指導ができるように、日本でもチームを細かくカテゴライズするべきである。

また、小さな頃から多くの試合を経験させ、選手の才能を伸ばすために、本格的なリーグ戦を整備するべきである。

さらに、優秀な選手を次々に輩出するために、地域社会に根付いたクラブ中心の選手育成環境を作る必要がある。